

# NEWSLETTER

THE JAPANESE SOCIETY FOR  
PARAPSYCHOLOGY

May 1979

No. 14

## 文12回日本超心理学学会大会の開催について

本年度の年次大会を12月22日(土)23日(日)の両日開催することを予定しております。沢山の研究発表を期待致します。お忙しいと存じますが、実験或は理論についての御研究を今より進められる様お願い致します。シンポジウムのテーマとして「Survivalの問題」「念写」を考えております。大会実施要領に同じ御意見も寄せ下さい。

## 文10回超心理学夏期研修会の開催について

本年度夏期研修会を8月下旬或は9月上旬の金、土、日、に開催することを予定しております。主なテーマとして、「超心理学にコンピュータを利用する問題」「PKの問題・念写」を考えております。実施要領の細部について次号でお知らせ致します。

## 書評

岡部金治郎: "人間は死んだらどうなるだろう?"

文三文明社 1979

本書は岡部氏による「人間死んだらどうなるのか」(1971)の続編として書かれたものであって、記述にも多くの重複があるが特に思索の進展があったと見られないが、氏の主張を承る所は、「人間は死ぬば、肉体は滅びてしまふが、魂の核は滅びておらずのてはなく、生まれ通しのものであって、いつかは人間として再生の可能性がある」ということである。ただ、本書で新しい点は、物質的なものを生物化するものとして超物質的な"X"なるものを仮定する所にある。例之は単なる高分子化合物であるDNAを生物の中の働きとして活性化させるためには、このXが必要であるという。

彼は、この様に、<sup>復的</sup>超物質的存在を仮定し精神的存在としての人間の特性を説明するが、ESP、PKなどの超常的現象は、「偶然の一致、巧みなインテリゲンチによるものであると見なされる」と否定的な立場をとる。これはライオン博士が、ESP、PKが超物理的性質を持つのは心が物質と異なる法則に従うことを示すものだと考へるのと対照的である。また、超心理学は、科学的方法を

を基盤として、所謂「魂」の問題に近づこうという形を示しているのに対し、工学者である著者は、生物に超物質的なものの存在を仮定し、これは科学的に接近出来ないものであると断定してしまうことは、興味ある相異である。

何れにしても、氏の之は「推理科学」なるものは、我々も大いに試みてみたいものである。

## 学会ニュース

文133回月例研究会 1979年5月20日(日) 10.00~16.00 東京都教育会館にて開催。出席者、金沢元基、望原敏雄、<sup>大谷栄司</sup>、祝大輔のJ.A. Palmer: Personality Traits in Experimental ESP Research. の紹介、大谷氏によるS. Guarino: Thermodynamic Radiationの紹介があった。また、本年度夏期研修会及び文12回大会についての討議案について討議を行った(別掲)また、清田サキによる念写実験について、近く有志が集って、計画を立てることにした。

## お知らせ

文134回月例研究会の開催 下記要領で次回の月例研究会を開催する。多くの方の参加を期待します。  
期日 1979年 6月17日(日) 10.00~16.00  
於 学士会館分館 9号室 文京区本郷 東大隣り (03)814-5541, 地下鉄丸の内線・本郷三丁目下車 徒歩5分、国電お茶の水より荒川土手行きバス「赤門前」下車

## Hand book 輪読

J.B. Rhine: Extrasensory Perception

文春 六、車正道

## 講演

中華民国における超心理学研究の現状

中華民国超心理学研究会 副総幹事 夏鶴氏  
(文春中)

NEWSLETTER 1979年5月20日発行 100頁  
編集・発行: 日本超心理学学会 200円

S. Guarino : Thermodynamic Radiation.  
Casella P. Guarino, Bellavista,  
Italy, 1975.

紹介者 大谷宗司

著者 Dr. Salvatore Guarino は、1921年 Naples 生まれ、biochemistry の領域で研究に従事している。1965年より ESP の研究を始め、ESP 研究に関するパンフレット、研究論文の発表を行い、1971年には、The Academy of medical and Surgical Sciences at Naples で telepathy の新理論について演説した。本書は、彼の ESP に関する論文を集めた英訳したもので、彼の ESP 理論が紹介されている。

彼は、telepathy は clairvoyance とは異った現象であるという立場をとる。そして、telepathic information は本来、Sender から percipient に対し完全に伝達されるものであるとし、これは Newton の情位の法則に相当するもので、law of equality と呼ぶ。また telepathy は、異った人の脳の間で起る場合と、同じ人の脳の異った部分の間で起る場合とがあり、telepathy の伝達の効率、送り側と受入れ側の脳の状態の equality の程度に依存する。従って、同じ脳の中での telepathy は最も効率が高く、異った脳の間の場合、夫々の脳の記憶内容の類似の程度によってその効率は変化する。このように、telepathy は、思想の内容そのものが伝達されるのではなく、percipient の脳の記憶の中で Sender のそれと共通したものが喚起される現象である、という。

telepathy をこのように考えると、例えば telepathy が日常稀にしか起らないという事は次のように説明される。telepathy は「同調」によって起る。それはラジオの装置にたとえることができ、各人は telepathy の放送局であり、固有の波長をもっている。そして各人は、その事を知らず、誰もが自分自身とだけ交信して、他の人の送信を受取らないにすぎない。また、telepathy の起る確率は、telepathy カと、記憶内容の equality の度合の積に比例する。この事により telepathy が強い感情状態や興奮状態の時起り易いことが説明される。

更に彼は、telepathy の生理的理論を展開するが、それは、彼が行った telepathy 実験(実際は ESP テスト)に基づいている。彼の行った実験は次のような

ものである。

0から9の数字の1つを書いたカード10枚をランダムに並べておき、perceiver に最終的「言葉」を語らせさせる。Sender は夫々の語に偶数或は奇数を当てこめ、perceiver には教えない。sender はカードの順にこの語を perceiver に送る。その時 perceiver が返事をすると、target の語を書き続ける。適答があつたら、適中不適中を+、-で記入して行く。10 trials を1 series, 3 series で1実験とする。

16人の被験者について1640 trials, 895 hits,  $d' = 1.75$ ,  $CR = 3.70$ ,  $P = .00022$ , 彼はこの実験で多くの薬剤の効果を調べた。その結果 Vitamine B<sub>1</sub>, B<sub>6</sub>, 及び ATP を与えた時高い positive は得られず、得られずに。

彼はこの結果から、positive telepathy は catabolic exergonic type (異化的発エルゴ型)の biochemical reactions に、negative telepathy は anabolic endergonic (同化的吸エルゴ型)の reactions に関係している。両反応は、生体の中で平衡を保っているもので、ESP 実験でも、仲々 positive の結果のみを得ることが困難なのも、生体のこの過程がそういう性質を持っているからであり、また、ESP 得点の positive と negative に移行する position effect も、生体が異化的過程から同化的過程へと移行し平衡を保つためである。と説明する。そして彼は更に ESP 得点を調べ、被験者のその時の生理的過程が、異化的か同化的かを推定することからできると主張し、ESP テストは臨時的な利用価値があるという。

Guarino の著作は、ESP の実験を他の研究領域の研究者が行い、自分の領域から結果を解釈する時におけると思われる誤りの例を示したものである。余りに多くの結果が不可解な条件と結果の間の対応が、幸にして合理的説明を与えられた時、早まった結論を導くべき例として考えることができる。ESP 現象は、この様な方法で研究を進めるには余りに不安定であるとははなげかばならない。更に彼の場合、理論の最初から多くの仮定を置くが、その仮定が果して適切であるか従来の ESP 研究結果を十分に参考にするべきであらう。更に現象の説明を試みない場合、限定された範囲の現象について先づ理論考へるという方法は、一つの有効な方法といへよう。